

## 正岡子規の漢詩

佐藤利行

### 一. はじめに(正岡子規について)

正岡子規は、慶応三年(一八六七)に愛媛県松山に生まれた。本名は常規、幼名を処之助、また升といつた。祖父の大原観山に漢学を学びながら小学校を終え、明治十三年(一一八〇)松山中学に進学した。明治十六年に松山中学を退学して上京し、翌年に大学予備門に入学、文学や哲学への関心を高め、詩歌や俳句を始めた。夏目漱石に出会ったのもこの時期のことである。

明治二十三年(一八九〇)東京帝国大学国文科に入学。明治二十五年六月から『獺祭書屋俳話』を『日本』に連載、俳句革新の口火を切った。この年、大学の学年試験に落第し、大学を退学、十二月に「日本」社に入社した。この年以降、句作が急増する。

明治二十八年、日清戦争に従軍記者として赴いたが、その帰途に咯血し、以後は長い病床生活に入る。明治三十一年二月に『歌よみに与ふる書』を発表し、短歌革新に着手した。『古今集』を否定し、『万葉集』や源実朝を称揚し、根岸短歌会を結成。俳句・短歌

に並んで文章革新運動を起こし、写生文を提唱した。脊椎カリエスに悩まされながら、病床にあつて『墨汁一滴』『病床六尺』『仰臥漫録』などを発表した。

明治三十五年(一九〇二)九月十九日、絶筆三句を残し、三十六歳の生涯を終えた。

### 二. 正岡子規の漢詩

正岡子規(一八六七―一九〇二)はその生涯において、およそ二千首の漢詩を残している。その中で、子規が最初に作った詩が、次に挙げる「聞子規」(子規を聞く)という五言絶句である。

聞子規

一声孤月下 一声 孤月の下

啼血不堪聞 啼血 聞くに堪へず

夜半空欹枕 夜半 空しく枕を欹つ

古郷万里雲 古郷 万里の雲

自注に「余作詩以此為始」（余の作詩は此れを以て始めと為す）とあるように、子規が初めて作ったのがこの詩ということになる。

子規は慶応三年に松山で生まれた。武士の家に生まれた子規は、八・九歳の頃から外祖父で漢学者であった大原観山のもとで漢詩の素読を始めた。その頃のことについては、『筆まかせ』（明治二十一年）に、次のようにある。

余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり。余が八・九歳の頃、外祖父観山翁のもとへ素読に行きたり。其頃の事なりけん。ある朝玄関をはいりしに其のほとりに二・三人の塾生が机をならべるしうちに、一人が一の帳面を持ち、其中には墨で字を書き其間に朱にて字を書きたるを見たり。それは何にやと問へば詩なりといふ。余は固より朱字の何物たるを知るよしもなく詩はどんなものとも知らず。ただ其朱墨相交るを見て綺麗と思ひしなるべし。早く年取りて詩を作る様になりたしと思へり。

其後、観山翁は間もなく物故せられしが、ひきつづきて土屋休明先生の処へ素読に行きしかば、終に此先生につきて詩を作るの法、即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のならべかたを習ひしは明治十一年の夏にて、それより五言絶句を毎日一つづつ作りて見てもらひたり。

先に挙げた「聞子規」の詩は、まさにこの頃、すなわち明治十一年

に作られた五言絶句なのである。慶応三年に生まれた子規であるから、明治十一年といえば、満十二歳。ここで驚かされるのは、今の小学六年生の年齢にして、こうした漢詩を作ることができたということである。「聞・雲」が韻を押しおむのは言うまでもなく、難しいとされる平仄の規則もきちんと守られている。

○ ○ ○ ● ● ●  
○ ○ ○ ● ● ●  
● ● ● ○ ○ ●  
● ● ● ○ ○ ●

○が平字、●が仄字であるが、この平仄の配列は、五言絶句の平仄のきまり通りである。わずか十二歳の少年が、どうしてこれほどまでに見事な漢詩を作ることができたのか。

その答えは、先に引用した『筆まかせ』の中にある。「即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のならべかたを習ひ」とあるように、当時、漢詩を作る際には『幼学便覧』を参考にしていたのである。『幼学便覧』の中に「客舎聞子規」の項目があり、そこには子規が作詩に用いた詩語「一声・孤月下・啼血・不堪聞・半夜・欹枕・古郷・万里雲」がすべて網羅されている。『幼学便覧』とはそのような作詩のための参考書であり、そこに集めてある詩語を並べると、自然に漢詩ができる仕組みになっているのである。

種徹夜喧鳴只為官。	客舍野子規	一色 春暮	催歸 枕前多愁烟	曉月 雲間啼血	半夜 微雨 欲曉	江山 故鄉 青山	孤客 遊人 芳樹	烟雨 子規 杜宇	帝破 殘花 夢覺	殘妻 鸞鏡 暗月	春 杜鵑 深樹	斷續 輕烟 殘月	玉漏 啼歸 思家	雙鐘 紗窓 秋
王秋江	萬山西 江水西	萬山西 江水西	望欲迷 曉雲迷	陽低 落日低	文天 江雲 暮雲	萬里雲 海天	月色 離群	落日 曛 欲斜照	不堪聞 不忍聞	欲聞 月中	轉孤月下 長江	山 歸 人不寐	歸不得 那天遠	

次に、東京大学在学中から親交のあった夏目漱石が、明治二十八年（一八九五）旧制松山中学校に赴任するに際して子規が送った詩を見てみよう。（注①）

送夏目漱石之伊豫（夏目漱石の伊豫に之くを送る）

去矣三千里 去けよ 三千里  
 送君生暮寒 君を送れば 暮寒生ず  
 空中懸大嶽 空中に大嶽懸かり  
 海末起長瀾 海末に長瀾起こる  
 僻地交遊少 僻地 交遊少に  
 狡兎教化難 狡兎 教化難からん  
 清明期再会 清明 再会を期す  
 莫後晚花残 晩花の残はるるに後ること莫かれ

詩題に見える「伊豫」とは、今の愛媛県のこと。東京から松山までの長い旅路や、任地での苦勞を思いやる子規の思いがこの詩からは読み取れる。

この詩の首聯「去矣三千里、送君生暮寒」は、『莊子』逍遙遊篇の冒頭に見える次の文を踏まえている。

北冥有魚。其名為鯢。鯢之大，不知其幾千里也。化而為鳥。其名為鵬。鵬之背，不知其幾千里也。怒而飛，其翼若垂天之雲。

是鳥也、海運、則將徙於南冥。南冥者、天池也。齊諧者、志怪者也。諧之言曰、「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里。去以六月息者也。」

北冥に魚有り。其の名を鯤と為す。鯤の大きさ、其の幾千里なるかを知らざるなり。化して鳥と為る。其の名を鵬と為す。鵬の背は、其の幾千里なるかを知らざるなり。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海運れば、則ち將に南冥に徙らんとす。南冥とは、天池なり。齊諧なる者は、怪を志る者なり。諧の言に曰く、「鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶搖を搏ちて上ること九萬里。去りて六月を以て息する者なり。」と。

子規は、ここに見える「三千里」「去」という語を用いながら、『莊子』の表現を借りることによって、暗に漱石が「鵬」のごとき逸材であると聞いたかたのではなからうか。

頷聯「空中懸大嶽、海末起長瀾」は、これから漱石が旅して行くであろう情景を想像してのものである。陸路では大空に聳え立つ「大嶽」を越え、海路では押し寄せ長く連なる波「長瀾」を越えて行くのであろう、という情景描写ではあるが、この「大嶽」は富士山を想像させ、これも漱石を日本一の名山である富士山になぞらえていると見ることもできる。「長瀾」の語も、海の果ての松山の地まで子規の教育が波及するであろう、とその才知を称揚する思いが言外に込められているとも考えられる。

ところで、子規の此の詩に対して漱石は、次のような詩を返している。

## 無題

海南千里遠	海南 千里遠く
欲別暮天寒	別れんと欲して 暮天寒し
鉄笛吹紅雪	鉄笛 紅雪を吹き
火輪沸紫瀾	火輪 紫瀾を沸かす
為君憂国易	君の為に国を憂ふるは易く
作客到家難	客と作りて家に到るは難し
三十巽還坎	三十 巽にして還た坎
功名夢半残	功名 夢半ば残す

この詩は、明治二十九年一月十二日、松山市二番町八番戸上野方より下谷区上根岸町八十二番地 正岡子規宛てのがきに見えるものである。そこには、

送別の詩拝誦、後聯尤も生に適切乍粗末次韻却呈。

という前書きがある。先にみた子規の詩に「次韻」したものである。すなわち「寒・瀾・難・残」という同じ韻字を用いての作である。一般に次韻の詩は、相手への友情・敬意を表すものとされていて、

単なる言葉合わせではない。

「海南」とは、四国のこと。「紅雪」は、曲の名と思われるが、よく分らない。「火輪」とは、火輪船で、蒸気船のこと。いわゆる当時の中国語。「巽還坎」について、「巽」とは易の八卦の一つで、人におくれをとることの象徴。「坎」も八卦の一つで、艱難を象徴する。

時に三十歳であった漱石は、「客」旅人となり故郷を離れては、家に帰ることは難しいもので、それは君主のために国家のことを憂えることよりも、もっと辛いことであり、「功名」を得たいという思いも半ばくずれてしまった、という自らの心情を吐露している。

次には、明治十八年に作られた詩の中から、「詠日本刀」と「巖嶋」の二首の詩を見てみたい。

詠日本刀（日本刀を詠ず）

日本刀鋒鋭絶倫 日本刀の鋒は 鋭きこと絶倫  
 紛々魍魅尽逡巡 紛々たる魍魅も 尽く逡巡す  
 請看国宝叢雲剣 請ふ看よ 国宝叢雲の剣  
 億万斯年護帝宸 億万斯年 帝宸を護る

この詩は、いわゆる詠物詩である。今回、子規の詩を見るに当たりテキストとして用いたのは講談社『子規全集』巻八「漢詩・新体詩」

に収める『漢詩稿』である。このテキストは、国立国会図書館に蔵する子規の自筆本を底本としてものであり、そこには改作の跡を見て取ることができる。この「詠日本刀」詩にも、その改作の跡を見ることができ。

まず、第一句の「鋭」字は、もとは「元」字であった。すなわち、「元より絶倫」。また、第二句の「紛々」は「心驚」から改められた。「心驚かざる魍魅は」と読むのであろう。

第四句「億万斯年護帝宸」は、初稿は「万古千秋護帝宸」であったが、「千秋」を「依然」と改作した。すなわち、

万古千秋護帝宸 万古 千秋 帝宸を護る

から、

万古依然護帝宸 万古 依然として 帝宸を護る

と改作され、さらに、

億万斯年護帝宸 億万 斯年 帝宸を護る

に改められたのである。ここには、子規の漢詩制作における推敲の過程が見て取れて興味深い。

次に、広島にも縁のある宮島（厳島）を詠んだ詩を紹介しよう。

厳嶋

海中起宮殿	海中に 宮殿起ころ
非是蜃気楼	是れ蜃気楼に非ず
名曰厳嶋社	名づけて厳嶋社と曰ふ
遠矣所来由	遠きかな 来由する所
毛公曾用武	毛公 曾て武を用ひ
一挙復君讎	一挙 君の讎を復す
特筆記義戦	特筆して 義戦を記すも
寂莫三百秋	寂莫たり 三百秋
借問人不知	借問するも 人は知らず
往事何処求	往事 何れの処にか求めん
城塞皆已非	城塞 皆已に非きも
山高海長流	山は高く 海は長へに流る

この詩を理解するには、日本の歴史を把握しておく必要がある。すなわち、日本の天文二十四年（一五五五）十月に、安芸の国の厳島で毛利元就と陶晴賢との間で行われた「厳島の戦い」の背景を知っておかないと、この詩の内容を理解することは難しい。日本の漢詩を研究する場合、ことに中国人研究者が日本漢詩を取り上げる場合の難しさは、こうしたところにある。（注②）

また、この詩の第十一・十二句「城塞皆已非、山高海長流」は、言うまでもなく人事の儂さと自然の悠久とを対比的にとらえたものであるが、これは杜甫の「春望」詩に、

国破山河在 国破れて 山河在り  
城春草木深 城春にして 草木深し

とあるのに通ずる思いである。当然のことながら、子規も杜甫の此の句を意識していたであろう。このように、文学研究においては、取り上げる作品を読むだけでなく、それと同時にその作品が作られた時代背景、文化の状況などを総合的に理解することが必要なのである。

### 三. 子規の漢詩と俳句

子規の俳句が漢詩からの影響を受けていることは、これまで多くの指摘がある。ここでは、二・三の例を紹介したい。

まず、王維の「過香積寺」詩を見てみよう。

過香積寺（香積寺に過る）  
不知香積寺 香積寺を知らず  
数里入雲峯 数里 雲峯に入る  
古木無人逕 古木 人逕無く

深山何処鐘 深山 何処の鐘  
 泉声咽危石 泉声 危石に咽び  
 日色冷青松 日色 青松に冷ややかなり  
 薄暮空潭曲 薄暮 空潭の曲  
 安禪制毒龍 安禪 毒龍を制す

この王維の詩から、子規は次のような句を得ている。

道細く 人にも逢はず 夏木立なつこだち

ひやひやと 朝日うつりて 松青し

毒龍を 静めて淵の 色寒し

こうした例は他にも多くみることができる。これら漢詩と俳句の関わりについては、稿を改めて詳述したい。

#### 四. おわりに

今回の考察を終えるにあたり、子規が残した最後の詩を紹介することにした。

(無題)

馬鹿野郎糞野郎 馬鹿野郎 糞野郎  
 一棒打尽金剛王 一棒 打ち尽くす 金剛王  
 再過五臺山下路 再び過る 五臺 山下の路  
 野草花開風自涼 野草 花開いて 風 自から涼し

子規の『病床讀書日記』(明治三十三年)には、次のようにある。

十一月十五日 朝、寒暖計五十七度。原稿を作る。

午後、下痢。維摩經を読む。余仏教を奉ぜず。仏教を詠むは仏教斯の如しと見るのみ。試に其中の語を題にして数句を作る。

是身如泡。不得久立。

風の 吹くや泡無き 蟹の口

是身如芭蕉。中無有堅。

六尺の 緑枯れたる 芭蕉かな

先の詩は、明治三十五年に「叫喚の間」に作ったとされている。脊椎カリエスの苦痛に耐えながら残された此の詩から、我々は子規のどのような思いを感じ取ればいいのか。

## (注)

①富永一登・朝倉孝之・岡本恵子・佐藤利行「現代に生きる中・高校生のための日本漢詩・日本漢文の教材化(2)」(『学部・附属学校共同研究紀要』第三十五号・広島大学学部・附属学校共同研究機構)参照。

②日本漢詩において、よく取り上げられるのが所謂「和習」(和泉)の問題である。吉川幸次郎先生は『続人間詩話』その九十三「佐久間象山」の項で、次のように言われる。

「いったい江戸時代の人人の漢詩文は、ごく初期の林羅山その他少数者をのぞき、大てい語学的に正しく、日本語的な語法の混入、すなわちいわゆる「和習」は、ある種の人人が軽率に予想するほど、多くはない。

しかし、中国人が日本漢詩を読む場合には、地名など日本固有の名詞や、日本人独特の発想に基づく表現などが多くあり、これらはなかなか理解され難い。例えば清の兪樾が編纂した日本漢詩集『東瀛詩選』は、編者が改編したり修改したために、却って本来の味わいを損ねてしまったものも多くある。この点については、郭穎「『東瀛詩選』における兪樾の修改―「和習」について―」(『中国学研究論集』第二十二号・広島中国文学会)を参照。



## 正岡子規的漢詩

佐藤利行

正岡子規（1867—1902）在他短暫的生涯中，共留下約兩千首漢詩。小論首先就子規最初的作品《聞子規》開始研究，在讀解其內容的同時，另參照《送夏目漱石之伊豫》、《詠日本刀》、《巖島》等詩篇，試以考察其漢詩的特色。